

1 「本質的な問い」による題材構想について

- 本題材では「なぜ川の音楽を作ったのだろう」という問いを学習の過程で繰り返し提示したことで、学習が進むたびに「川の音楽を作った理由」が変化（深化）していくことを生徒自身が実感することができた。「本質的な問い」を基に題材を構成すると、確かに学習の本質を意識し、学びを深める題材構成とすることができた。

「本質的な問い」に対して生徒が答えを求めていくことができるよう、次の三点を意識して「問い」を構成した。

- ①既習体験や既習知識の土台をそろえること。
- ②学びに必然性を感じられるようにすること。
- ③生徒が自分の考えを見付けるまで必要な「繰り返し」や「試行錯誤」の機会を保障すること。

「本質的な問い」による学びづくりは、「学習者基点の学び」となるように、題材を構想することが大切であると改めて感じた。

2 題材で育成を目指す資質・能力について

【知識・技能】

- 音楽が苦手な生徒も、音楽の良さや作曲家の意図を考える場面で、自分の考えをもつためには、知識や技能を活用しながら音楽の特徴をつかんでおく必要がある。本単元では、旋律、音色、リズムなどの音楽を構成する要素に着目させたことで、生徒は楽器の変化による音の高低や音色の変化に気付き、それをワークシートにまとめることができた。

【思考・判断・表現】

- 本校の課題は「思考力」であり、音戸中学校区の共通の課題として「根拠をもとに自分の考えを説明する力」を育成する必要がある。音楽の鑑賞活動で根拠となるものは、音楽を構成している要素（速度・強弱・拍子・リズム・音色・旋律など）である。これらの言葉を活用しながら自分の考えを表現することができるよう、音楽の要素を視覚化し、鑑賞する視点を与え繰り返し聴く活動を十分確保した。この結果、音楽が苦手な生徒も音楽の良さや作曲家の意図を考える場面で、自分の考えを表現することができた。

生徒の思考の変容例：「なぜ川幅が広がっていくように感じられるのだろう」

<1回目視聴>

強弱がだんだん強くなっているから。

<3回目視聴>

使われている楽器の種類が増えているから。（演奏人数が増えたから／楽器が変わったから）

<7回目視聴>

使われている楽器の種類がフルートなどの高い音の楽器にだんだんと低音の楽器が加わり、響きに厚みが増したから。

- 思考の基となる音楽の特徴を見付ける作業に困難さがあった。1回目の視聴で音楽の要素に気付くことができた生徒は6人だった。そのため、当初の計画以上に音楽を聴く回数を増やし、比較の視点を明確に示す必要があった。

【主体的に学習に取り組む態度】

- 本題材の本質的な問いである「なぜ川の音楽を作ったのだろう」を解決するためにはチェコという国への共感と、生徒の郷土愛を関係付ける必要がある。そのためにチェコの美しい自然や日本とは違う食文化を生徒に調べさせるとともに、本質的な問いをより自分事として捉えさせるために、「もし私たちが日本や呉、音戸の風景や文化を音楽で残すなら？」と問いかけ、ふるさとである呉の風景についても考えさせた。チェコの風景や文化を調べたり、チェコと日本（自分のふるさと）を比較したりすることを通して、音楽鑑賞に主体的に取り組めるようになった。

3 「デジタル機器」の活用

- 「主体的に学習に取り組む態度」の育成を図るため、デジタル機器を効果的に活用した。前述したとおり、チェコの風景や食文化を調べる学習に加え、「私が音楽にしたいふるさとの風景」というテーマでタブレットを活用して紹介させた。生徒が考えた様々な「音楽に残したいふるさとの風景」を共有することで、作曲家の思いに共感させることができた。このタブレットを活用した学習活動では友達からのリアクションが得られるので、自己肯定感を感じやすく、また自分が知らない情報も友達から得ることができるため、協働的に学ぶ良さも実感できた。さらに画像を使った紹介にしたため、表現することに苦手意識をもっている生徒も自分の考えを伝えることができた。